

カッサンドラの警告
——ドリス・レッシングの『生存者の回想』を読む——

手塚 裕子*

The Warning of Cassandra
Reading Doris Lessing's *The Memoirs of a Survivor*

Yuko TEZUKA

Abstract

Doris Lessing was born in Persia (now Iran) in 1919. Both of her parents were British. In 1925, the family moved to Rhodesia (now Zimbabwe). She married twice and had three children. In 1949, Lessing left her second husband, and moved to London. That year, she published her first novel, *The Grass is Singing*. Lessing was awarded the Nobel Prize for Literature in 2007. The Swedish Academy described her as “an epicist of the female experience, who with skepticism, fire and visionary power has subjected a divided civilization to scrutiny.”

Lessing is concerned with various problems of the modern world; the threat of nuclear war, earthquakes, and global warming. She, like Cassandra in Greek Mythology, warns us of the coming of dreadful disaster.

In this paper I would like to discuss Lessing's *The Memoirs of a Survivor* (1974). It is a story set after the end of the world. In the ruins of a city, a middle-aged woman remains alone in her apartment. From her window she watches the world fall apart and records what she witnesses. It is not only a work of science fiction but also a critique of the modern world. After the disastrous experience of 3.11, I am convinced that this novel suggests something very important to the reader.

Key Words: Doris Lessing, Nobel Prize, Feminism, Science Fiction

*教授 英文学

手塚 裕子

はじめに 3.11 以後の文学

2011年3月11日、東日本大震災の巨大津波は一瞬にして平和な日常世界を破壊した。津波をかぶった福島第一原発は炉心溶融という深刻な事故を起こし、周辺地域は人の住めない立ち入り禁止地域となり、放射能は大地と空気と海をも汚染し、今も私たちの生活を脅かしている。3.11を境として、私たちの生活と意識にも大きな変化が生じた。言葉を失うほどの大災害を前にして、私は、文学は無力なのだろうか、文学の果たすべき役割は何なのだろうか、しばしば自問した。そして、このような危機の時代だからこそ、私たちは物語を必要とするのだと考えた。人類の長い歴史を振り返れば、どの国家も、どの民族も、地震、戦争、疫病などの大災害を記した文学をもっている。つまり、それは、書くことが、破滅的な状況から再生するために必要不可欠だったからである。本稿では、3.11の経験を踏まえて、危機の時代における文学の力を顕彰するために、ドリス・レスリング(Doris Lessing, 1919-)の『生存者の回想』(*The Memoirs of a Survivor*, 1974)を読みたいと思う。

『生存者の回想』とは、文明世界の崩壊後、廃墟と化したロンドンと思われる都市のアパートで生存していた、一人の初老の女性のメモワールである。ドリス・レスリングは科学者ではないので、科学的な根拠によって、終末後の世界を描いたのではない。彼女は、私たちの日常生活、および人間の心の奥底を冷徹に見つめることによって、文明社会の危うさと終末を確信した。『生存者の回想』とは、つまり、未来小説というより、現代文明の批評書である。本作品の翻訳者である大社淑子氏は、レスリングのノーベル賞受賞を記念した『英語青年』のレスリング特集記事の中で、次のように述べている。「レスリングのSF小説は、いわゆる冒険小説や科学小説ではない。主体となるのは宇宙小説とも言うべき空と星の話であり、そうした枠組みのなかで現代世界ならびに社会を考える一種の社会小説である。(中略)レスリングにとってのSF小説は、従来の小説の枠を越えて、自由に想像力を飛翔させることのできる新しいジャンル、境界のない可能性を示唆する新世界であったにちがいない。」¹

1. ドリス・レスリングについて

ドリス・レスリングは、2007年度、ノーベル文学賞を受賞した。87才という、史上三番目の高齢での受賞だった。スウェーデン・アカデミーは、レスリングを「女性の経験を描く叙事詩人であり、懐疑心と炎の情熱と想像力によって、分割された文明を精密に吟味した」“epicist of the female experience, who with skepticism, fire and visionary power has subjected a divided

civilization to scrutiny”²と称賛した。

まず、レッシングの略歴を紹介しよう。Doris May Lessing は、1919年10月22日、ペルシャ（現在のイラン）でイギリス人の両親の長女として生まれる。父、Alfred Taylor は、帝国銀行の銀行員だったが、第1次世界大戦に従軍して片足を失っていた。1925年、レッシング5歳の時、父は南ローデシア（現在のジンバブエ）に農場を購入し、一家はアフリカに移住する。14才で、レッシングは学校を中退し、看護師、タイピスト、秘書など、さまざまな職に就き、自活しながら独学で学んだ。レッシングは、自分自身を“an early drop-out”³と呼んでいる。

19才で最初の結婚をし、2児の母となる。ローデシアの人種差別主義に反対して社会主義に傾倒する。23才で離婚し、同じ社会主義者のGottfried Lessingと再婚し、息子ピーターが生まれるが、4年後にこの結婚も破綻し、1949年、レッシングはピーターを連れてロンドンに帰る。

帰国後、アフリカを舞台とした小説、*The Grass is Singing* (1950) が認められ、ロンドンの文壇にデビューする。続いて自伝的要素の濃い作品、*The Children of Violence* (1951-69)、そして1962年、代表作となる、*The Golden Notebook* (1962) を発表する。この作品は、フェミニズムのバイブル的作品となり、今も高い評価を受けている。しかし、レッシングは、*The Golden Notebook* の成功に安住することを拒み、フェミニズム以外のジャンルに果敢に挑戦し、1974年、SF小説、*The Memoirs of a Survivor* を発表し、1980年代に書かれた連作、*The Canopus in Argos* は、カノープス系と呼ばれる大きな星座の中の惑星を描く宇宙小説である。SF小説を過少評価する偏見に反発して、レッシングは、「SF小説の中にこそ、現代の最良の社会小説がある」“...the best social criticism of our time is in science fiction.”⁴と語っている。

同時代のイギリス女性作家、マーガレット・ドラブルは、レッシングを称賛して、一つのジャンルに囚われず、常にフロンティアを開拓する創作活動こそ、作家のあるべき姿であるとして、次のように述べている。

She has also had the most remarkable career, changing her field of operation. She started off writing small domestic novels with an African base, but then moved to space fiction. She's just, over a very long career, been very productive and very inspiring and always totally honest and courageous, a touchstone of how the writer ought to be. She's never written for the market, always for what she thought she had to say.⁵

1986年、レッシングは旧ソ連のアフガン侵攻の最中、パキスタンとの国境ベシヤワルのアフガン難民キャンプを訪問し、戦争の実態を見極めようとして現地の人々を直接取材し、翌年、

ノンフィクション、*The Wind Blows Away Our Words*、(邦題『アフガニスタンの風』)を発表する。当時レッシングは、68才だったが、その行動力は驚くべきである。その後、ソ連は1989年にアフガンから撤退したが、2001年9月11日、アメリカ同時多発テロを引き金として、今度はアメリカとイギリスがアフガニスタンと戦争している。出口の見えないアフガン情勢を読み解くために、この作品には大きな意義がある。

レッシングは、現在までに、26の長編小説、17の短編小説集の他、オペラ、自伝、ノンフィクション、猫にまつわるエッセイなど、多種多様の数多くの作品を生み出してきた。2007年のノーベル賞受賞後も旺盛な創作活動を続けてきたが、2008年に出版された『アルフレッドとエミリー』*Alfred and Emily*、2008が、おそらく最後の作品となる予定である。2012年10月には、93才の誕生日を迎える。

2. 終末後の都市の風景

まず、『生存者の回想』の舞台となる、文明社会崩壊後のロンドンと思われる都市の終末の風景を見てみよう。この都市では野蠻と無秩序が支配している。人々は都市を捨てて、どこかへ避難しようとするが、安全な避難場所があるわけではなく、彼らの行方も彼らの運命もわからない。ただ、人々はどこかへ避難したいという気持ちに駆り立てられて、都市を出て行く。空になった家は、略奪されたり、貧しい家族によって不法占拠されていた。治安を守るべき警察が機能しない、危険な都市で、語り手である「私」は、物語が始まった時、既に数か月、若しくは数年を、アパートの一階の自室で生き延びていた。

「私」は、名前も年齢も住所も不詳の人物である。ふつうのメモワールの場合、失われた過去を賛美し、郷愁に満ちた思い出を語るのだが、「私」は、ノスタルジーに流されることを徹底的に拒否し、目の前に広がる終末後の世界を、ただ淡々と語り続ける。彼女は、かつて愛した男たちや、自分が産んだ子供たちについて、一切、語ろうとしない。過ぎ去った愛の思い出に耽溺しては、過酷な時代を生き延びることはできない。「私」は、ノスタルジーを拒否して、次のように語っている。

Nostalgia, no; I'm not talking of that, the craving, the regret --- not that poisoned itch. Nor is it a question of the importance each one of us tries to add to our not very significant pasts... (8)

「私」にとって過去の世界は、安楽で便利だったが、「贅沢と浪費と過食の生活だった。」“our ordinary living, our affluence and waste and overeating” (46) この言葉から、文明世界が崩壊したのは、人々が利便性を追求し、行き過ぎた贅沢と浪費と過食に原因の一端があることが、明らかである。ここは「さまざまな知性の廃墟」“the ruins of this variety of intelligence” (71) である。しかし、旧世界を破滅させた直接的原因が何であったのか、「私」は最後まで明言を避け、ただ「それ」としか語らない。「それ」は、核戦争なのか、大津波なのか、隕石の衝突なのか、それとも地球の気候の変化なのか、いずれにせよ、「それ」は、文明を終焉させる恐ろしい力をもった出来事である。「それ」は、太古の昔から人々に襲いかかり、人々は、その恐怖を、神話や歴史の中に書き込んできた。しかし「それ」は、目に見えないインクで書かれているので、通常は読めない。「それ」は破滅や危機が訪れた時、突然、くろぐろと躍り上がって前面に出てくるものである。つまり、「それ」が人の目に見えるようになるのは、危機が迫った時のみである。「私」は、危機を記す文学について、次のように述べている。

Perhaps, indeed, 'it' is the secret theme of all literature and history, like writing in invisible ink between the lines, which springs up, sharply black, dimming the old print we knew so well.... I am sure that ever since there were men on earth 'it' has been talked of precisely in this way in times of crisis, since it is in crisis 'it' becomes visible, and our conceit sinks before its force. For 'it' is a force, power, taking the form of earthquake, a visiting comet whose balefulness hangs closer night by night distorting all thought by fear --- 'it' can be, has been, pestilence, a war, the alteration of climate, a tyranny that twists men's minds, the savagery of a religion. (130)

「それ」とは、個人レベルでは、突然の事故や病気によって、死と直面した時、集団レベルでは、巨大津波によって壊滅した都市を目の当たりにした時などに、はっきりと意識されるものであり、「何かが終わってゆくという意識」“a consciousness of something ending” (130) である。

「それ」は、常に私たちの傍らに潜んでいるのに、危機が来るまで、私たちの目には見えないという点で、「それ」は、人間の「どうしようもない無知、またはどうしようもない認識」“the word of helpless ignorance, or of helpless awareness” (130) を表す言葉である。

私たちは、生まれた時から、いつか必ず死ぬ運命を背負っているのに、死を直視しないで毎日を生きている。また歴史を見れば、隕石の衝突が恐竜を滅ぼし、氷河期がマンモスを滅ぼし、

火山の噴火で消滅した都市、海底に沈んだ文明、戦争によって滅亡した民族や国家は数えきれず、私たちの住む国、文明、そして人類全体も、いつか必ず滅びる時が来るのは明白なのだが、私たちはその事実から目をそらして、日々を過ごしている。そして3.11が来て、私たち日本人は、みな、何らかの形で「それ」を見、日本の原子力発電所に事故は起きないという安全神話は崩壊し、「地面が足元から崩れてゆく感覚」“this feeling that the ground was dissolving under our feet” (120) を実感したのではないだろうか。

3.11に関わる日本政府の無能、無責任な対応は、『生存者の回想』の世界の政府とそっくりである。巨大津波から1年半を経ても、復興がはかどらず、福島第一原発は今でも安心できない状況であるのに、政府は早々に原発事故の収束宣言を出し、事故よりも党内抗争や政局、選挙に夢中になっている。『生存者の回想』でも、政府は国民を救済するために何ら対策をとらず、ただ、永久に際限のない会議に時間を費やして、しゃべるだけなので、「私」は皮肉をこめて、彼らを「おしゃべりや」「the Talkers」と呼ぶ。彼らは、「社会から最大の利益を受ける社会の一派」であり、国民の生活より、自分自身の権力を長続きさせることを常に優先し、「外で起こっている事態には目をつぶり、名声と富でできたガラスの鐘の中でぬくぬくと暮らしている人々」だった。

Has there been a time in our country when the ruling class was not living inside its glass bell of respectability or of wealth, shutting its eyes to what went on outside? (92)

政治家や官僚たちは、自分の権力の温存が第一目的であるので、社会が終焉するような大事件が起こっても、「たいしたことは何も、少なくとも取り返しのつかないことは何も起こっていない」“as if nothing much was happening --- nothing irreparable” (91) と国民と自分自身を欺く。新聞やニュースも政府の公式発表に従って、国民の目を現実の危機から目をそむけさせることに加担する。国民もまた、今まで安住してきた日常世界が崩壊したという、恐ろしい現実を出来れば認めたくないという気持ちが働いて、子供だましの気休めのような政府の発表に、すがりついてしまう。こうして、政府とマスコミと国民は一致して、過酷な現実から目をそらそうとして、三者の間で、「自分たちの弱さを見なくてすむようなゲーム」(20) すなわち、現実逃避の「共犯のゲーム」“the game of complicity” (92) が始まるのである。

「あらゆる形の社会組織が崩壊していく間、私たちは、まるで根幹にかかわることが、何も起こっていないかのように、生活を調整しながら生きていた。ふつうの生活を営もうとする試みがいかに決意の固いものであり、頑固で、ひとりで蘇っていくものであるかは、驚くほど

だ。」(19) 語り手である「私」も、このような状況下で、アパートの賃貸契約を7年間延長した。7年後も、この生活がつづくという保証はどこにもなかったのに、「私」も「共犯のゲーム」に加担せざるを得なかった。それほど、安定を求める私たちの欲求は強いのである。

『生存者の回想』の中の状況は、3.11の後の日本の状況と完全に重なる。福島第一原発がメルトダウンしていたのに、それを隠して、「ただちに健康に被害はありません」と言い続けた日本政府。後に、「国民をパニックから守るために、真実を公表しなかった」と弁解したが、国民の間には、政府が嘘をついたという事実は、政府に対する不信感を植え付けてしまった。しかし、東京の水道水から放射能が検出された、あの最悪の頃、私もまた、「明日になれば、よくなるのではないか」と虚しい期待をしたことがあった。政府の発表を疑いながらも、心のどこかで、「あの原発事故はたいしたことありません」という言葉を聞いて、安心させてもらいたいと願っていたのも事実である。だから確かに、あの時の日本には、政府と国民とマスコミの間に「共犯のゲーム」があったと思う。

だが、その「共犯のゲーム」の裏側で、まちがいなく進行しているのは、国民の政治不信、政治離れである。有効な復興対策をとらないまま、無駄な会議に時間を費やし、選挙対策に熱中している政治家への失望。マスコミは選挙を煽るが、国民の政治への関心は冷えるばかり。現在の日本の状況は、『生存者の回想』の中で、「私」が述べた状況と同じである。つまり「この頃では、だれもが一番興味を感じないのが、政府の形を変えることだった。私たちが望んでいたのは、政府の存在を忘れることだけだった。」“...for the last thing that interested anyone by this time was changing the form of government: we wanted only to forget it.” (156)

以上が、『生存者の回想』の「私」が住んでいた社会の状況である。さて、物語は、一人暮らしの「私」の部屋に、突然、エミリーという12才位の少女が現れたところから、新しい局面へと展開する。

3. エミリーの成長

ある日、見知らぬ男が「私」の部屋に、一人の少女を連れてきて、「これがその子供です」と言って立ち去る。少女の身元は不詳で、「私」にはその子を育てる義理もないのだが、不可能が可能になり、異常が平常になる状況下で、「私」はエミリーと彼女のベッドで猫のような黄色い犬のヒューゴウを引きとり、二人と一匹の同居生活が始まる。最初は、エミリーに冷淡だった「私」も、次第にエミリーに対して、保護者のような気持ちを抱くようになり、少女エミリーの成長を注意深く見守るようになる。こうして、文明が崩壊した後、少女が如何にして大人の

女性へと成長してゆくのかという、フェミニズムの要素を含む、新しいテーマが展開する。

エミリーは、まじめで従順で、全身で人目を気にして、大人の顔色を窺い、利発で、感受性の鋭い、孤独な美しい子供だった。終末後の世界では、学校制度は崩壊しているのだから、エミリーは学校には行かない。彼女の教育は、もっぱら周囲の大人を観察することだった。ほとんど一日中、彼女は窓辺に座って、外を眺め、そこで行われているすべてに夢中になった。時には、通行人を批評して、面白いコメントを述べて、「私」を楽しませることもあった。

数日の間に、エミリーの体には変化が現れ、胸が女らしい形を取り始め、異性に興味をもつようになった。その頃、窓の外の反対側の舗道の木の下に、60人ほどの若者の群れがいた。彼らは、この都市を通り抜けて、どこかへ移動しようとする「移動する大群」“the moving hordes” (33) だった。季節は9月で、まだ暑かったので、若者の一団は、路上生活を営み、舗道の上で焚火を作り、何かの肉を焼いていた。「私」たちは、窓から若者たちを眺め、彼らはいつ出発するのだろうかと考えていた。大人にとっては、脅威の存在である若者の群れに対して、エミリーは強い関心を示し、彼らに近づいていった。「私」は、夜遊びを始めた思春期の娘をもつ親のように、心配しながら、一晩中彼女の帰りを待った。いつのまにか、彼女に危険が及ばないように、油断なく彼女を見張り、彼女の世話をすることが、「私」の全生活を占めるようになっていった。

その頃から、「私」は、エミリーの子供時代のヴィジョンを見るようになる。子供部屋に、4才位の小さな女の子がいて、ベッドに赤ちゃんが眠り、乳母と母と父がいる。母は、育児に疲れて、次のように、父に小言を言っている。

No one has any idea, do they, until they have children, what it means. It's all I can do just to keep up with the rush of things, the meals one after another, the food, let alone giving the children the attention they should have. I know that Emily is ready for more than I have time to give her, but she is such a demanding child, so difficult, she always has taken a lot out of me, she wants to be read to and played with all the time, but I'm cooking, I'm ordering food, I'm at it all day, well you know how it is, there isn't time for what there has to be done, I simply don't have time for the child. (61)

育児に関する不満を述べる母の小言は永遠につづき、小さなエミリーは、絶えず苦情を言われ、自分が一番の罪人であることを自覚していた。エミリーは父のそばにすり寄って、父親と同じ苦痛と罪の意識にみちた黒い目で、小言を言う母親をじっと見つめていた。

それにしても何故、「私」は、赤の他人であるエミリーの子供時代を細部に至るまでリアルに再現できたのだろうか。これは、エミリーの子供時代というより、作者レッシングの子供時代の再現である。レッシングの母は、インテリの女性だったが、育児に時間をとられ、心身共に疲れ果て、娘に苛立ちをぶつけることが多かった。その一方、跡取りである弟を溺愛していた。母から愛されなかった子供時代の思い出は、レッシングの心に消えない傷を残した。エミリーが作者レッシングと同一人物であるなら、エミリーと語り手「私」も同一人物となる。

エミリーと「私」が年齢が違うだけで、同じ過去、同じ性格を共有する同一人物であるなら、作品中で語られるエミリーの成長は、架空の自伝となる。つまり、文明の終わった世界で自分自身が少女から大人へと、どのように成長していくか、実験していることになる。レッシングは、批評家クレア・トマリンとの対話の中で、『生存者の回想』は、自伝、それも夢のような形で語られる自伝であると、次のように述べている。

When I wrote *Memoirs of a Survivor*, I said that I was trying to write my autobiography. No one is remotely interested in this, nor ever has been, unfortunately. I was trying to write an autobiography in this form, an autobiography of dreams, in dream form.⁶

だが、エミリーという名前は、レッシングの母の名と同じである。母から愛されない少女エミリーは、レッシングであると同時に、レッシングの母でもある。母から愛されなかった少女は、大人になって娘を愛さない母になる。母と娘の間で、愛の欠落が連鎖している。絶望したエミリーが、やがて無慈悲な母になることは、はっきりと示されている。「その小さな腕は必死で慰めを求めて差し上げられたが、それはいつの日か、一度もやさしさを教えられたことのない、あの大きな腕になるものだった。」(128) 批判されているのは、レッシングの母という個人ではなく、女性を家庭に閉じ込め、育児の負担を女性だけに押し付けてきた、父権社会の歪みである。ここには、フェミニストとしてのレッシングの一貫した主張が反映されている。

では、「私」の思春期の記憶が投影されたエミリーが、如何にして、文明と秩序が崩壊した世界で成長していくのかを詳しく見てみよう。エミリーが興味を示した若者たちの群れは、冬が来る前に、次々に旅立って行った。冬の間、エミリーはアパートの部屋にこもって洋服を作った。35年前に「私」が使っていた古いミシンを取り出し、「危機以前の時代に作られた上等の布地」や縫い糸や巻尺を買い、自分を魅力的に見せるような洋服を作り、化粧をし、ポーズをとって、「新しい自分自身の発明」(53)に熱中した。「私」は、「このような野蛮と無秩序の時代に」、「この小さな少女が、私たちの古い文明が残したごみの山から自分の夢をかなえて

くれる材料を探し、それを見つげ出し、それに手を加えて、あらゆる不自由にもめげず、自分のイメージに生命を与えるやり方——あまりにも古いイメージ、あまりにもうちこわしがたい、筋違いなイメージを眺めることに」(52) 圧倒された。エミリーは、次々に奇抜な衣装を作っては、脱ぎ捨て、まるで、さなぎが次々に殻を脱ぎ捨てるように、大人の女性へと成長した。

初春の次第に暖かさが増してくる午後、再び、30人くらいの若者たちの群れが路上に現れ、エミリーは、まもなく、群れの一つのリーダーであるジェラルドと恋に落ちた。それは、昔からよく言われてきた「初恋」だった。ジェラルドは彼女の英雄になり、二人は結ばれた。

ジェラルドは、弱者は保護しなければならないという信念をもっていたので、9才から11才の路上生活者の子供たちの面倒をみることになった。子供たちの親は、暴力や伝染病で死んだか、または子供たちを置き去りにして逃げていた。ジェラルドは、大きな空家を見つけて、1ダースの宿無しの子供たちと住み始めた。電気はなかったが、水道はまだ出た。家の裏庭に畑を作り、その家は弓矢や棒で武装した子供たちによって守られた。季節は、再び、暑い夏になった。

こうしてエミリーとジェラルドと子供たちは、新しい家族を形成した。エミリーは幸福の頂点にいたが、ジェラルドには他にも恋人がいることが発覚して、エミリーは悲嘆にくれる。新しい世界でも、ボスをめぐる女たちの嫉妬の構図は変わらない。「私」は、なぜエミリーは、ジェラルドと同じ位の能力があるのに、自分がリーダーとなって、自分自身の一隊を率いなかったのだろうかと考えた。恋をしているエミリーは、自分がリーダーになるより、リーダーの女、ボスの女、もちろん唯一の女になることだけを望んだ。古い文化が崩壊した後でも、恋する女性は、恋人に対するあこがれの気持ちから、自分自身がリーダーになる資質や能力を自ら封印してしまうのである。「私」は、残念な気持ちをかみしめながら、それが歴史なのだと、あらためて認識した。

次第にエミリーは、新しい家の中で、子供たちに指示や命令を与える「権威」となり、子供たちは彼女に服従していた。古い社会と同じような上下関係が、新しい家族の中にも生まれていた。エミリーは、「階級組織をもたないでいることは不可能なのね。どんなにそうしまいと努力しても、だめなのね」(112)と言う。「あなたは、そのむずかしさを味わった最初の人間じゃないわ」と、「私」は答える。この対話には、かつて理想的な共同体を夢みて、共産主義を信奉しながら、結局、どの体制でも、人間の集団には、上下関係が生じることを知って、共産主義に失望した作者レッシングの苦々しい体験が反映されている。

エミリーが来てから2度目の夏が終わるころ、エミリーは、ジェラルドの顧問兼情報源として、集団の中で確固たる地位を築いていた。その頃、都市に新しい「子供ギャング」が現れた。

一番年上の者が、9才か10才。彼らは、一度も親を持ったためしがなく、家族のやさしさを一度も味わったことがないようだった。或る者は、「地下道」で生まれて、そこに棄てられた。彼らはどうやって生きのびてきたのか、誰も知らなかった。彼らには、今までの常識は通用しなかった。彼らは、生き延びるためなら、人を殺して食べることもあったし、何の理由もなく、衝動的に友達を襲撃することもあった。彼らは、他の誰よりも、どの動物よりも邪悪だった。デニスという子供は、4才の殺人犯だった。

しかし、ジェラルドは、その凶暴さの故に恐れられる子供たちを不憫に思い、彼らを自分の家に連れてくるが、あまりの乱暴さのため、もとの「家族」だった子供たちが、全員、家から逃げ出す結果になった。エミリーも彼から距離を置き、他の女の子たちも去って行った。

一人になることに耐えられないジェラルドは、新しい子供ギャングを彼の子供たちにした。ジェラルドは、いつでも自分がリーダーになりたくて、子供を保護者したがっていた。それは、彼の善良さでもあるが、弱さでもあった。ボスとして強がっている男の弱さを見抜いた時、エミリーの愛は急速に冷める。ジェラルドは、エミリーが子供たちの世話を手伝ってくれることを要求したが、エミリーは、もう彼の要求に応えるには、疲れすぎていた。彼女は、35才か40才くらいの成熟した女の目で、かつては、彼女の英雄だったジェラルドをみつめ、彼の欠点を冷淡に批判する。こうして、エミリーの恋は終わった。「彼女は今後二度と、自分から進んでこうした苦しみのどれかを経験することはないだろう。」(169) 恋する少女は、男に献身的につくして家庭を築き、成熟した大人の女になるが、身勝手に幼稚な男に幻滅した時、女は無慈悲で冷淡な批評家になり、そして恋は終わる。それは、古い社会から繰り返されてきた、ありふれた男女の恋の始まりと終わりだった。

「おいらはお城の王様だ」というマザーグースの歌の歌詞は、子供ギャングの不気味な軍歌となる。彼らは、剥き出しの人間のエゴそのものだった。彼らは、自分が生きのびるためなら、平然と人殺しをした。彼らは、恩人であるジェラルドでさえ襲撃した。それでも、ジェラルドは小さな子供たちを救わなくてはならないと思いつけるが、冬が来るころ、子供ギャングたちは、どこかへ姿を消した。「私」とエミリーとヒューゴウとジェラルドの4人の静かな生活が始まる。舗道の上には、もう誰もいなかった。

水道は止まり、空気は呼吸することができないほど汚染されていた。しかし、水は古井戸や泉から採取できたし、空気は、ハンドルを回して充電できる空気清浄器によって浄化できた。食べ物は、庭で野菜や動物を育てて調達し、薪のかわりに廃材を燃やして暖をとることもできた。文明社会は後退し、原始時代の生活が侵入していた。空っぽの都市に植物が生い茂り、再び春が来るころには、緑の生命が蘇り、動物たちが繁殖するだろう。こうして、文明社会が崩

壊し、人間が立ち去った後の都市に、植物と動物たちによる再生が暗示された時、「私」の生活にも最後の時が訪れる。

4. 壁の向こう側へ

ある朝、壁の上にかすかな黄色いしみができて、「私」が待ち受けていた隠されたパターンが出現した。壁の向こう側の部屋で、人々が絨毯の模様合う柄物の布地を絨毯の上に重ねているのが見えた。「私」とエミリーとジェラルドとヒューゴウが、その世界に足を踏み入れた時、「私」が、ずっと探し求めていた一人の女性が姿を現す。

壁の向こう側の世界のヴィジョンは、物語の早い段階から、断続的に語られている。最初に「私」が壁の向こうに行った時、「私」は、次のように感じた。「すると、この上なく強烈な期待感とあこがれが湧き上がってきた。この場所には私が必要としていたもの、そこにあるとわかっていただけのもの、そして——もちろん、一生の間、待ち望んでいたものがあつた。」(15)

二度目に壁を通り抜けた時、「私」は、甘いあこがれのような、ひとつの顔を見た。その顔こそ、最後の瞬間に現れた女性の顔である。

その女性は、この小さな崩壊した世界を出て、まったく別の秩序の世界へと入って行ける道を示した。エミリーは呆然自失の有様で、ヒューゴウは美しさとやさしさと威厳と支配力にあふれて、二人は敷居をわたる。ジェラルドは、周囲を見回して、ためらっていたが、最後の瞬間、彼の子供たちがやってきて、彼にしがみつき、彼らは大急ぎで他の人の後を追った。その時、最後の壁が溶け落ちて、この作品は終わる。

この最後のヴィジョンは、レッシングが信奉するスーフィズムの神秘思想——現世を超えたもう一つの精神世界があるという思想——と呼応している。「ここには、長い間さまざまな聖典を読みつけ、ついにはスーフィズムを信奉するに至った、レッシングの神秘主義的な傾向が現れている。」と、大社は解釈している。⁷ だが、別の批評家、Jeanne Murray Walker は、この作品の結末を“puzzling”であり、多くの読者を失望させたと批判している。⁸ 確かに壁の向こう側にある別の秩序ある世界への救済という結末は、リアリスティックな小説の結末としてはあり得ないが、レッシングが書きたかったのは、Orwell や Huxley の描く黙示録“apocalypse”ではなく、Thomas More や Plato の描く寓話“fables”であると、次のように述べている。

No, my novels are fantasies, or utopias in the truest, most precise sense of the term, to be

カッサンドラの警告

sure, rather less related to Orwell and Huxley than to Thomas More and Plato. They are fables, spun out of what is happening today.⁹

最後の場面がユートピアに向かう生存者たちの姿であるとするなら、そこには、確かに、古い社会の偏見や差別を越えた、新しい世界の予兆が現れている。たとえば、ユートピアへと導くリーダーは、男性ではなく女性であり、犬のヒューゴウは、人間同士が共食いをする時代の中で、常に変わずエミリーを守る誠実な恋人であった。また、多くの親が子供を見捨てて逃げ出したり、母親が育児に疲れて苛立つ時代で、ジェラルドは自分が殺されそうになっても、子供の世話をしようとする献身的な親だった。特に、最後に、人々から恐れられた子供たちが、ジェラルドと共に、ユートピアへと向かった場面では、レッシングが子供たちの未来にかすかな希望を繋いでいることを示している。愚かさで混沌の現代社会に対して、警告を発しているレッシングではあるが、彼女は全くのペシミストではない。レッシングは自身のオプティミズムについては、Margaret von Schwarzkopf とのインタビューの中で、次のように語っている。

From childhood on, I've never been a pessimist, but rather I see less occasion at the moment for any great optimism. Wherever one looks, stupidity and chaos. But perhaps a small chance exists that the ship can once again steer clear of the reefs. We have to start with the education of children, to teach them how to accept themselves as complete individuals, regardless of their group or race.¹⁰

最後のヴィジョンは、作者レッシングの希望を表しているが、このヴィジョンは、語り手である「私」に希望を与え、困難な時代を生き延びる力の源である。つまり、「私」が生存者となれたのは、現世を超えたヴィジョンを見る力があったためである。絶望してしまったら、生き延びることはできない。文明が終末を迎えた世界では、生き延びるために、食物を調達したり、火をおこしたりする実際的な知識や技術も必要だが、ヴィジョンを見る力もまた必要なのである。現実の社会を直視し、問題をあぶり出し、警告を発するカッサンドラである作者レッシングは、また同時に、ユートピアのヴィジョンを見る“visionaire”でもあったのである。

おわりに カッサンドラの警告

ギリシャ神話に登場するトロイの王女カッサンドラは、巨大な木馬の中にギリシャ兵が潜ん

でいることを察知して、髪を振り乱して、危険が迫っていることを警告するが、トロイ人は、誰もカッサンドラの言葉に耳を傾けず、トロイはギリシャに攻められ、滅亡する。レッシングは『アフガニスタンの風』第1章で、破滅に向かう現代世界に対して、私たちはカッサンドラのように、警告の叫びをあげるべきであると主張する。

Cassandra is a shout of warning coming from everywhere, particularly from scientists whose function it is to know what is likely to happen, from people everywhere who concern themselves with public affairs, anyone who thinks at all. You could say the whole world has become Cassandra, since there can be no one left who does not see disasters ahead.¹¹

アメリカから日本に帰化した作家リービ英雄もまた、カッサンドラの警告を叫ぶ作家である。彼は、9.11 や 3.11 のような絶望的な時代の中で、文学を書くこと、表現することについて、次のように語っている。

表現すること、つまり文学は希望につながります。完璧な絶望状態なら表現はしない。書くことは、現代にも未来にも絶望していないことの印です。9.11 の後、僕は沈黙し、その後には表現が生まれた。沈黙という熟成が必要だったんです。だから、たぶん、いつかは3.11 のことを書くのだと思う。¹²

2007年12月7日、ノーベル賞の受賞記念レクチャーで、ドリス・レッシングは、文学のもつ力について、次のように述べている。

The storyteller is deep inside every one of us. The story-maker is always with us. Let us suppose our world is ravaged by war, by the horrors that we all of us easily imagine. Let us suppose floods wash through our cities, the seas rise. But the storyteller will be there, for it is our imaginations which shapes us, keep us, create us—for good and for ill. It is our stories that will create us, when we are torn, hurt, even destroyed. It is the storyteller, the dream-maker, the myth-maker, that is our phoenix, that represents us at our best, and at our most creative.¹³

「たとえ私たちが引き裂かれ、傷つき、破壊されたとしても、私たちを創りあげるのは、

カッサンドラの警告

私たちの物語である。物語の語り手、夢を見る人、そして神話を創る人こそ、私たちのフェニックスであり、最上にして、最も想像力豊かに、私たちを表現するのである」という、レッシングの言葉は、今も私たちの心に響き渡り、そして、勇気を与えるのである。

(2012年9月)

Text

Lessing, Doris. *The Memoirs of a Survivor*, 1974. London: Harper Perennial, 2007.

レッシング, ドリス, 『生存者の回想』, 大社淑子訳, 水声社, 2007.

本文に引用した訳は、大社氏の翻訳を参考にした。

Notes

- 1 大社淑子, 「文明の批評家ドリス・レッシング」, 『英語青年』, 2月号, 研究社 2008.
- 2 Crown, Sarah, "Doris Lessing Wins Nobel Prize," *The Guardian* 11 October 2007.
- 3 "Doris Lessing" from BBC World Service. (<http://www.bbc.co.uk/worldservice/arts/features/womenwriters/lessing...>).
- 4 Ingersoll, Earl G., ed. *Doris Lessing: Conversations*, Ontario Review Press, 1994, p.169.
- 5 "Doris Lessing" from BBC world Service.
- 6 Ingersoll, 174.
- 7 大社淑子, 『ドリス・レッシングを読む』, 水声社, 2011, p.124.
- 8 Walker, Jeanne Murray. "Memory and culture within the Individual: The breakdown of social Exchange in Memoirs of a survivor," *Doris Lessing: The Alchemy of Survival*, eds. Carey Kaplan and Ellen Cronan Rose, Ohio UP, 1988, pp.108-9.
- 9 Ingersoll, p.107.
- 10 Ingersoll, p.107.
- 11 Lessing, Doris. *The Wind Blows Away our Words*, Pan Books, 1987.
- 12 リービ英雄, 「9.11 沈黙から希望へ」, 『朝日新聞』, 2012年9月11日.
- 13 Lessing Nobel Prize Lecture. (<http://nobelprize.org/prizes/literature/laureates/2007/lessing-lecture.html>)

Bibliography

Brewster, Dorothy. *Doris Lessing*. Twayne, 1965.

Crown, Sarah. "Doris Lessing wins Nobel Prize," (<http://books.guardian.co.uk/books/2007/oct/11/>)

手塚裕子

- nobelprize...). *The Guardian*. Reviewed 11 Oct. 2007.
- Ingersoll, Earl G., ed. *Doris Lessing: Conversations*, Ontario Review Press, 1994.
- Kaplan, Carey, and Ellen Cronan Rose, eds. *Doris Lessing: the Alchemy of Survival*, Ohio UP, 1988.
- Lessing, Doris. *The Wind Blows Away our Words*, Pan Books, 1987.
- Lessing Nobel Prize Lecture. (http://nobelprize.org/_prizes/literature/laureates/2007/lessing-lecture.html).
- Russell, Jesse and Ronald Cohn. ed. *Doris Lessing*, Pubmix, 2012.
- 大社淑子, 『ドリス・レッシングを読む』, 水声社, 2011.
- . 「ドリス・レッシング」, 『英語青年』, 2月号, 研究社 2008. “Doris Lessing” from BBC World Service. (http://www.bbc.co.uk/worldservice/arts/features/womenwriters/lessing_...).